神々の奇魔愚麗（きまぐれ）

fuura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神々の奇魔愚麗（きまぐれ）

【Ｎコード】
Ｎ６２９２Ｚ

【作者名】
ｆｕｕｒａ

【あらすじ】
時代小説か・・そう思って読み始めたあなた
違うんですよ

このお話は、神々がしかけた壮大な
お遊び

それに翻弄される
各次元の狭間で生きる

人間達の

壮大な冒険ロマン

小説です

さあて

どんな仕上がりになるんでしょうね

序章

真っ暗な夜道。

突然の黒い集団。

バラバラと提灯を投げ捨て、店主と番頭が一目散に逃げ去った。

襲ってきた相手は６人。いずれも黒い覆面で顔を覆っている。

命を狙われていると、幻十郎に用心棒を頼んだ店主と番頭が逃げたというのに、この刺客達、逃げた店主達には目もくれず、なんの躊躇いをみせず幻十郎を取り囲んだ。

笠岡の下卑た顔が頭をかすめた。

あの男に嵌められたか

・・・

胡散臭い話だとは思った

が・・こう言うカラクリか。

どうやら狙いは私らしいそう、悟った幻十郎は、ススっと身を大木の背に張り付かせた。

六人とも、中々な手練だ。

手加減などしていては、我が身が危ない。

スラリと引き抜いた刀の切っ先を足元に垂らすと、油断なく六人を見渡した。

中ほどの一人が、頭目らしい。

この男の殺気は相当なものだ。

目線の合図と同時に二人の刺客が小さな気合とともに、幻十郎に切りかかってきた。

難なく交わした。

交わし際二人の、胴と背を切り裂き、切った相手には目もくれず残りの四人に切っ先を向ける。

ザザッと四人の輪が広がった。

幻十郎の腕を見くびっていたようだ。

互いに目線を交わしあっている。
切っ先が少し震えていた。

今だ！

幻十郎は自ら切りかかって行った。

攻撃は最大の防御だ。

左、右、そして腹部に突きと、あっという間に、三人が呻き声と共に崩れ落ちた。

残った頭目らしい男が、

林の中から一般道に逃げた。

いや・・

逃げる気はないらしい。

足場を確認すると、その刀を中段に構えた。

ギラつく眼差しを幻十郎に向けると、やにわに、黒覆面を片手で剥ぎ取るや、地面に放り投げた。

眼光鋭い、精悍な男だ。

「何ゆえ私を狙う」

男がニタリと笑った。

と・・突然

そのまま切っ先を幻十郎の喉元に二度三度と、突き刺してきた。

「喪心流か」

男の顔に狼狽が走った。

「邪剣と忌嫌われ、その

流派は無くなったと聞いていたが」

なおも呟く幻十郎に、男はさらに突きを放つ。

軽やかな足さばきで、すんでのところで、その突きをかわす幻十郎に、男は、それでも執拗に突きを放つ。

と、突然

月明かりの中、幻十郎の足もとに、一匹の蛙が現れた。

刺客の突きをかわしながら、このままいけば、蛙を踏みつぶす・・

咄嗟に思い、ほんのわずか足元をずらした時、隙が生まれた。

中々の手練だ。

この隙を見逃すはずがなかった。

男の放った突きが、幻十郎の腹部に深く突き刺さった。

離れ際、幻十郎も負けじと男の脇腹に刃を突き刺した。

相討ちだ。

そのまま離れた二人は、しばらくにらみ合ったまま相手を見据えていたが、やがて、男は剣を鞘に納めると

「とどめはいらぬな」

そう言い捨てると闇の中に溶けて行った。

確かに、このまま捨て置いても幻十郎は危ないかもしれない。

突かれた腹からはおびただしい血が流れ出していた。

このままでは、間違いな

く死ぬだろう。

そう思いながらも、幻十郎は、月夜に光る蛙を見ていた。

「お前のせいじゃないぞ。我が未熟のせい・・いや天命やもしれぬな」

そう微笑みながら、幻十郎は刀を鞘に納めると、鞘ごと刀を抜き、杖代わりに、歩きはじめた。

確か、この先に常磐津の師匠の家があった。師匠には迷惑だが、私を葬ってもらうにはうってつけだ。

最後ぐらいは美しい人に看取ってもらいたいし・・

ぼんやりとした視界の中に、見おぼえある常磐津の師匠の家が見えた時、幻十郎はそのまま深い地の底に引きずり込まれて

行った。

天井の節目が笑っていた。

左右を見ると、小奇麗に片付いた六畳ほどの一間。

中央に敷かれた布団に幻十郎は寝かされていた。

そっと掛け布団を跳ね上げ、腹部を手でなぞってみた。

真新しいサラシで腹部が固く巻かれている。

突かれた場所あたりを手でまさぐってみたが、わずかに痒い感じはするが、痛みはない。

どうやら生きているようだ。

死んでも惜しいとは思わなかったが、こうして生きているところを考えれ

ば、まだまだ神は私を生かしておくらしい。

上半身だけ起こしてみた。

わずかに痛みは走ったが起きられない痛みではない。

床の間には、自分の刀が置かれてあった。

常磐津の師匠の家か・・・

そう、思いだした時、隣の部屋から、聞き覚えのある、男の声がした。

「おう・・邪魔するぜ常磐津のう」

笠岡の子分の万吉の声だ。

親分の笠岡と違って義には厚い男だ。

幻十郎がいる部屋は一番奥の部屋らしい。

「なんです、いきなり扉

を開いて」

甘ったるい、師匠の声だ。

「親分からの言いつけで、３０両取り立てにきやした」

ん・・常磐津の師匠、笠岡に借金があるのか。

「何言ってるんですかねえ・・私が親分からお借りしたのは、一両、たった一両だけですよ。その一両も親分さんが、たっての願いだから借りてくれと、無理やり頼まれて借りただけのお金じゃありませんか、それが、なんですかねえ・・いきなり３０両だなんて」

どうやら、ややこしい話になりそうだ。

幻十郎は、枕元にたたんで置いてあった着物に、

袖を通した。

真新しい着物だ。

常磐津の師匠が用意してくれたものだろう。

香まで焚いてくれたのだろう。

いい匂いがする。

綺麗で独特の世界観を持った師匠だが、その生い立ちは何も知らない。

笠岡の屋敷で知り合い、気がつけば軽口を言いあうそんな程度の仲なのだが、死の間際で常磐津の師匠を思い出すとは・・・

幻十郎は、思わず苦笑いをした。

その師匠が、借金の取り立てに遭うとは、穏やかな話じゃない。

「すんません、師匠。あ

っしは詳しいことはよくわかりやせん。とにかく親分から３０両もらってこい、さもなきゃ、師匠を連れて来いと言われただけでして」

「あたしを、どこに連れて行くつもりなんだい？」

常磐津の師匠が笑いながら聞いた。

いつも、あれだ。

のらり、くらり、笑顔で相手を煙に巻いてしまう。

しかし、今回のこの話はどうも、胡散臭い。

どう考えても金に困ってない常磐津の師匠に無理やり１両借金させ、揚げ句に３０両返せとは、穏やかな話じゃない。

いくらあこぎな笠岡でも

、こうも露骨な手を使うにはそれなりのわけがあるんだろう、これは、師匠の笑顔だけでは解決できそうな問題じゃないぞ・・・

幻十郎は刀を脇に差すと勢いよく障子を開いた。

「あっ！」

万吉の目が、ひっくりかえった。
恐ろしいものを見るように幻十郎を見つめている。

「万吉の兄い・・どうしたんだよ。まるで幽霊を見るような顔をして」

「せ・・先生・・先生は死んだって聞いてたもんで」

「親分がそう言ったんだな」

「へい」

合点のいかない顔でいつまでも、幻十郎を見つめている。

「ほれ、私はちゃんと足がついている。幽霊なんかじゃないよ」

自然と常磐津の師匠をかばうように、万吉と師匠の間に胡坐をかくと、脇差を抜いて横に置いた。

どうも立っていると刺されたわき腹がうずいてしょうがない。

「で・・先生がどうしてここに？」

「どうして・・て。万吉の兄いよ。おまえさんも無粋なことを聞くじゃないか。男と女が一つ屋根のしたにいるんだよ、聞かずともおおよその事は想像つくだろうが」

「そりゃ・・まあ」

「で、万吉の兄い、さっきの話だがな、一両借りて３０両の返済・・こりゃ穏やかな話じゃないよな。師匠その一両はいつ借りたんだい？」

「二日程もまえかなあ」

とろんとした声で常磐津の師匠が答えた。

「兄いよ。おかしいと思わないかい。１両が２日で３０両だぜ。こんなあこぎな商売、笠岡一家ではやっているのかい」

「いえね、先生、こう・・先生の前だから言いやすがね、あっしもおかしいとは思ったんですがね、やっぱ、親分の指図には逆らえやせんし」

「じゃあ・こうしようや。ここは私の顔を立てて、このまま帰ってもらう。しかし兄いもまさか、手ぶらでは帰られないだろうか、この話は私が後から親分のところに話をつけに行くって・・これでどうだろうか」

まだ、納得のいかない顔をしている万吉に

「なんなら、ここで（どんぱち）やって兄さんの顔に一つ二つ切り傷でも作ろうか、そうしたら兄さんの面子も立つだろうし」

「いえ・・も・・もう・・めっそうもない。先生にたてつくなんて、あっしにはできやせんし」

幻十郎は、用心棒をしていた笠岡一家の若いもんに剣

術も教えていた。

教えるというより、暇を持て余していたので、退屈しのぎといったところか。

その中でも万吉は稽古熱心な男だった。

もともと剣術が好きなのだろう。

幻十郎の顔を見つけると、しきりに稽古をつけてくれと寄ってきた。

だからこそ、幻十郎の強さをよく知ってる男だ。

「わかりやした。すべて先生におまかせします」

丁寧に戸を閉めて帰って行った万吉達の気配が消えると、幻十郎は常磐津の師匠を見た。

目を細めて幻十郎を見つめている。

「すまない師匠」

「あら、、ぴったし。少し長いかなあと思いましたが、丈もちょうどいい」

「おお、この着物も、わざわざすまぬ」

「こうして改めて見ると、やっぱ旦那はいい男だねえ」

目を細めてジット幻十郎を見つめる。

「なにはともあれ、師匠、相すまぬ」

「何が相すまぬ？なんでしょうかね」

「血まみれの男が転がり込んで、さぞかし驚いたことでしょうね」

「幻十郎の旦那にこんな手傷負わせる人なんて、いるんですねえ・・

お江戸は広い」

「江戸の広さを感心する前に、驚きましょうや・・師匠」

幻十郎の呆れ声に

「いえね、ちょうど幻十郎の旦那の事考えていましたらね、外でごそごそ音がしましてね、見たら、幻十郎様がいらっしゃるじゃありませんか。ははん、これは神様が私に好きに使え・・てくださったんだな・・て思って、家に引きずり込んじゃったんですよ」

まるで玩具扱いだ。

「傷の手当ては？」

「私がしましたが、痛みますか」

「え・・師匠が？」

相当の深手だ。
素人が治療できる傷ではない。
さっき触った感触では、治療は完璧だ。さらしの巻き方など、とても素人の出来る巻き方じゃない。
医療に心得があったのか常磐津の師匠は・・。

「あまり動き回りますと傷口が開きますよ」

「師匠は、医術の心得もおありなんですか？」

「見よう見まねで」

とろんと語りそのまま、黙ってしまった。

微笑みを幻十郎に投げかけているだけだ。

思わず幻十郎の方から目線を外した。

不思議な人だ。
そばにいるだけで、温か

みを感じる。

「師匠、ひょっとして武家の出では？」

フト思いついて聞いてみた。

一瞬暗い顔をしたかと感じた師匠だが、よく見ればいつもの穏やかな顔で

「で・・幻十郎様はどうなさるつもりで？」

と話をすりかえる。

「どうなさるとは？」

「まさか、先ほど、お話されたように、私の為に笠岡の親分さんに掛け合いにいかれるわけじゃないでしょうね」

「行くといいましたから、もちろん行きますよ」

「おやめなさい。私ごと

き女子に、幻十郎様がお関わりなさると、ろくな事はございませぬ」

「そうは申されても、このまま黙って引き下がる親分とは思われませぬが」

「殿方の扱いは私は十分心得ているつもり。なあに、なんとかなりまする故」

師匠のニコニコ顔を見ていると、本当になんでもないような事に思えてしまうから不思議だ。

しかし、捨ててはおけない。

なんにしても常磐津の師匠は命の恩人だ。

こうして幻十郎の命があったのも、案外常磐津の師匠を助けるために生かされた命なのかもしれな

い。

これはある意味天命だ。

関わるなと言われても関わらざるを得ない。

「ちょいと出かけてきます」

ひょいと立ちあがった。

痛みが無い。

少し驚いたが、おくびにも出さず、刀を腰にさした。

「まだ太刀回りなどできるお身体じゃありませんよ」

あくまでも、冷静に師匠がほほ笑む。ここに及んで、何を言っても止めない幻十郎の気質を十分知っているのか、じっと座ったままだ。

「太刀回りにならぬよう話し合いだけで解決つけてきますから」

「だといいんですが・・
」

足早に立ち去ろうとする
丸二日寝たきりとは正直
驚いた。

道理で腹に力が入らない
はずだ。

ならば、まずは（あそこ
）に行かねばなるまい。

行き着いた先は料亭柳。
暖簾をくぐって店内を見
る。

誰もいない。
相変わらず不用心な店だ
。

奥に行こうとすると、そ
の奥から娘が出てきた。

「あ・・！」

幻十郎の姿を見つけると
小走りに寄ってきた。

１０歳になる、お小夜だ。

わけ合って、柳の店で働いている。

「女将さん呼んできます」

お小夜が飛ぶように店の奥に入ると、やがてカラカラと下駄の音が響いた。

「ま・・旦那、、何してたんですかね・・どこかにいい人でも見つけたんですか？」

「いや、チョイ大きな虫に腹を刺されてね」

自分の腹を軽く叩き、よろける素振りをした。

「あら、お怪我？」

気のいい女将だ。

幻十郎の仮住まいにもなっている。

亭主の橋爪厳衛門とは義兄とのつながりで、なんとなく居候する形になっていた。

物騒だから用心棒代わりに居てくださいと頼まれている態だが、義兄が裏で画策しているとは、幻十郎も薄々気付いてはいたが、知らぬふりをしていた。

堅物で、何かといえばそろそろ身を固めろと、口うるさいので、幻十郎もついつい、疎ましくなり、結局笠岡の家に入り浸り状態になってしまっていたのだが・・・。

「厳衛門さんは？」

「留守ですよ」

幻十郎のホッとした顔を見て、女将は思わず笑った。

「いえ・・そうじゃないんですが・・・」

女将にも逆らえない。

「何か御召しになりますか？」

「そうそう、ひさし振りに女将さんの手料理食べたくなりましてね」

「何をすっとボケたこといってるんですかねえ・・うちの料理はみんな、板さんが調理してるでしょうに」

「あはは・・そうでした」

「いつものお部屋で待っててください。すぐに用意させますから」

「すまない、女将さん。ところで矢七はいますか」

「ええ、いますが？」

「ついでに呼んでいただけませんかね」

「また、何か、危ないことと始めるんじゃないでしょうね」

女将が眉をひそめたので、幻十郎は慌てて打ち消した。

「違いますよ。聞きたい事があるだけですから」

矢七は、幻十郎が料理をおおかた平らげたころ、現れた。

気のつく男だ。

お盆に、徳利を二本乗せ、「いきますか」と飲む仕草をしながら入ってきた。

昔は名の知れた盗賊だったが、ある事件をきっかけに、きっぱり足を洗っ

ている。

今では、女将が褒める程の板前だ。

「相変わらず矢七さんの料理は旨いよ」

「女将さんが言ってましたよ。旦那は御世辞が下手だと」

「何が？」

「その料理は安が拵えたやつで」

安とは矢七の弟子だ。

「ひどいなあ、せっかく矢七さんの料理が食べられると思ってきたのに」

「あはは、すいません。あっしです。あっしが作りました」

矢七は幻十郎の前で胡坐をかくと、二人の間に徳

利が乗ったお盆をおいた。

「殿様がご心配されてますよ」

「またまた、矢七さんまで厳衛門さんみたいなことを言って。もう勘弁してくださいよ」

「ま・・一献」

矢七がついでくれたお酒を飲み干すと、

「うま・・い」

「でしょ。朱鷺の熊酒ですから」

「ああ・・道理で。じゃ、矢七さんも、まずは一杯」

「へい・・すみません」

一気にあおると、目を細め、しばらく酒の味を楽しんでいたが、やがて目

をあけ、口元を緩め

「で・・あっしに用とは？」

「この二日程で、浪人者の死体が五つほど出たって噂聞かなかったですか」

矢七の目がキラリと光った。

「浪人者の死体が五つ・・また、物騒な話ですが、さあ、とんと聞いたことござんせんが」

「そうですか。やっぱそんな話はありませんか」

どうやら、幻十郎が切った浪人どもの死骸は誰かが運んで行ったようだ。

「そのお腹の傷と関係ある話なんですか」

幻十郎の膨らんだ腹を見ながら矢七が尋ねた。

もう一杯、今度は手酌で酒を注ぎ、ぐいと飲み干す。

「わかりますか、この傷」

「着物の隙間から、真っ白なさらし、そりゃ目立ちますよ。で・・傷の方は大丈夫なんで？」

「死にそこないましたよ」

「出歩いて大丈夫なんで」

「常磐津の師匠に助けられましてね」

「常磐津の師匠に」

一瞬驚いた顔を見せたが、すぐに元の表情にもどると、酒を幻十郎にすす

めた。

そこで、常磐津の師匠の一件を、ざっと話してみた。

「旦那が常磐津の師匠の家に倒れ込んだ話は、しちゃ、いただけないんで」

いや、その件は私にも皆目わからないんだ。

そう言うと、幻十郎は、覆面の浪人に襲われたくだりも、矢七に話した。

矢七に隠し事は、初なっからするつもりはない。

「どう思います。矢七さんは？」

「そうですねえ・・それだけでは・・なんとも」

「で、ちょっと調べてもらえないかと」

「常磐津の師匠の件、それとも旦那を襲った浪人の件」

「いえね、私が思うにはこの二つの事件、なんだか関わり合いがあるように思えて、ですから、どっちを調べていっても最後は同じところに行きつくんじゃないかと」

「なるほど。わかりやした。で・・旦那はこれから、笠岡のところに行くおつもりで？」

「もちろん行きますよ。なんたって命の恩人ですから」

「なんなら、あっしも」

「いや・・私一人の方が」

「そうですか・・」

矢七が心配そうに幻十郎をみつめた。

料亭柳から出、ぶらぶら歩いていると、南町奉行所の門から一人の男が出てきた。

幻十郎を見つけると親しげに寄ってきた。

「幻十郎殿、お久し振りで」

「おお、丁度よかった。実は米山殿にお聞きしたい事があって」

「え、私に？また何か事件でも」

「いえいえそうじゃありません」

幻十郎は慌てて手を振った。

米山は南町奉行所の同心だが、少し早とちりのところがある。

うかつなことを言うと、

義兄の耳に入らないともかぎらない。

「中に入りますか？」

「いえ、今日はやめておきます」

「どうしてですか、雪絵様もご心配されていますよ」

「あ・・いや、姉上様には私がここに来た事は内密に」

幻十郎は慌てて手を振った。

「で・・私に聞きたい事とは？」

実は・・

源三郎は、ここ最近浪人同士の騒ぎがなかったか聞いてみた。

矢七に聞いたところではなさそうだが、ひょっと

したら、浪人といえど武士は武士。

あるいは、奉行所で話し自体を抑え込まれているやもしれないと確認にきたのだ。

幻十郎を襲った浪人者はいづれも、相当の手練達。

手加減などできず、いづれも致命傷になっていたはずだ。

あたり前にいけば、その死骸が発見されていいはずが、そんな話はないという。

誰かが死骸を片づけたのだろうが、手際が良すぎる。

訝しがる米山に、軽く暇を告げると、幻十郎は笠岡の屋敷に向かった。

常磐津の師匠の件もある

が、もともとあの用心棒の話は笠岡から頼まれた話だ。

しかもその頼み方が、あまりにも軽かったので、幻十郎もつい軽く引き受けたのだが、相手は、間違いなく幻十郎を狙ってきた。

ここは、どうしても笠岡の話を聞く必要がある。

もし、最初から幻十郎の命を奪う事が目的ならば、このまま笠岡の屋敷に行く事は飛んで火に入る夏の虫に近い。

しかし、幻十郎には、笠岡から命を狙われる覚えはトントない。

むしろ、今日まで仲良くやってきたぐらいだ。

その笠岡が急に幻十郎の命を狙いだした・・裏を知りたくなるのは人情と

いうものだ。

だいいち、笠岡の器で、あれだけ手練の浪人を一時に集める事などできないだろうし・・

裏で糸引く男をどうしても見つけてみたい、元来の好奇心がむずむず騒いでしかたがない。

笠岡の屋敷に行けば、はっきりする。

幻十郎は、足早に、笠岡の屋敷に向かった。

奉行所から少し離れたところで、息せききって走ってくる男に出会った。

道場着を着こんでいるので、どこぞの門下生か。

少し見覚えのある面構えだが・・

そう、いぶかしんでいると、一時は通り過ぎた男

が、慌てて戻ってきた。

「あ・・やはり幻十郎殿だ。これはよかった。大変です、みさとさんが一大事なんです」

「みさと殿が？」

みさととは、若くして、女だてらに道場を切り盛りしている、女剣士だ。

幻十郎もこの道場の門下生で、その昔、道場の跡目騒ぎでやめた経緯があった。

「道場破りです」

「道場破り？、しかし、みさと殿の実力ならば、そうそう遅れをとる相手もいませんでしょうに」

みさとの腕は、幻十郎が認めるほどの腕前だ。

そこいらの生半かな腕で

立ち向かえば、まずは叩き伏せられる。

それよりも、みさと殿が立ち会わずとも、あの道場には、四天皇と呼ばれる剛の者がいるはずだ。

たかが、道場破りでさほどうろたえる必要もなかろうに。

「大前さんが打ちすえられまして、他に四天皇の方がおられず、今みさと様が直接お相手されているのですが・・形勢が・・」

大前は、四天皇の一人だ、その大前がやられたとなると、相手はそうとうの手練。

たしかに、みさとでも危ないかも知れない。

二人は、急いで道場に向かった。

傷口が痛むかとも、思われたが、こうして実際に走ってみると、まったく痛まない。

それよりも驚くのは、身体が妙に軽いのだ。

まるで、跳ねるように走る事が出来、気がつけば、幻十郎のみが一人、道場に先着してしまった。

遅すぎるかも・・・との懸念もあったが、幸い、まだ、道場からは激しい気合の声が飛んでいる。

間に合った。

安堵感が流れる。

道場内に入り、眺めると二人は対座したままだ。

互いの息が荒いのは、相当打ち合ったものと思われる。

突然、頭の中に可愛い声が響いた。

「腕をへし折るつもりだよ、あの男」

ん？・・幻十郎は頭を振ってみた。
幻聴か？

「なにしてるんだよ、次の気合であの男、突きを繰り出し、倒れた女の腕をへし折るつもりだよ」

誰だ・・とは思ったが、確かに言われてみれば、間違いなくそんな雰囲気が察しられる。

男が、木刀の切っ先をみさとの喉元に合わせた。

「みさとさん、突きがきますよ。喉元に、しかも一の突きだけでなく、続けて何度も」

幻十郎の叫びに、道場中の視線が幻十郎に集まった。

声の主が、幻十郎と知ると、とたんに安堵感の空気が広がった。

幻十郎の実力は道場の誰もが知っていた。

「なんだお前は」

男が幻十郎を見据えた。下卑た口元に、忌まわしい過去が垣間見える。

人の生死で録を育んでいる男だ。

幻十郎を襲った浪人者がチラッと頭をかすめた。

「喪心流か」

道場中がざわめいた。剣術に親しんでいるものならば、一度は聞いた事がある邪剣の流派だ。

またの名を刺客剣とも呼ばれていた。

「名を名乗れ」

「お前の仲間を切った男だ」

いきなり、男が木刀を投げ捨てると、道場片隅に置いてあった自分の剣をつかむと鞘を投げ捨て、白刃を幻十郎に向けた。

「立ち会え」

「傷を負った男は無事だったか」

いきなり、男は切りつけてきた。

「貴様何をする、ここは神聖な道場だぞ」

あちこちから、罵声が飛んだ。

「待て、ここは私に任せてくれ」

みさとの目を見つめ、幻十郎は目くばせで自分

の考えを示した。

幻十郎と男は道場の中央に構えた。

「誰ぞも言っている。ここは道場だ。神聖な場で貴公と真剣で立ち会うことは出来ぬ。私と立ち会いたければ、木刀を持て」

「けっ、しゃらくさい」

男は、木刀に持ちかえると、ジリジリと幻十郎ににじり寄った。

木刀の先を幻十郎に向けいつでも突いてくる構えだ。

興奮はだいぶ落ち着いたようだ。

このまま正確な突きを打ち込まれたら、この身体・・・かわしきれぬやも・・・そんな弱気な思いがよぎったとき、また可愛い声が頭の中を駆け巡っ

た。

（飛んで、あいつが来たら、思いきり飛んで上から脳天叩き割ったら、勝っちゃうよ）

「誰だ、お前は」

（今はそんな事詮索してる暇ないでしょ。ほら・・突いてくるわよ、あの男、一突き目が勝負だわ。飛んで、思いきり飛んでみて、いいから騙されたと思って、とにかく飛んで！）

頭の中が、がなりたてる正体不明の雄叫びで、一杯になった時、最初の突きが放たれた。

「たぁ！」

短い気合とともに、幻十郎は思いきり飛びあがった。

「おお！！」

道場中がどよめいた。

一番驚いたのは幻十郎だ。

自分が思う飛びあがった距離と、実際の距離があまりにも違ったからだ。

２間（３・６メートル）程も跳躍したのだから、幻十郎自身も驚いた。

うそだろ！

思わずつぶやく。

人間業じゃないぞ・・・

これは。

それでも跳躍途中に、木刀の切っ先を、男のこめかみに当てる事は忘れなかった。

男は、もんどりうって転がった。

額からは、うっすらと血が一筋したたり落ちていた。

あまりにも高く飛び過ぎ切っ先を、かろうじて男に当てるのがやっとだった。

しかし、この跳躍は男の度肝を抜いた。

あきらかに戦意を喪失している。

「く・・くそ・・覚えておれ」

なんとも間抜けな捨て台詞を吐き捨てると、男はこめかみに手を当て、よろけるように道場から出て行った。

みさとが、ススッと幻十郎の傍に寄ってきた。

「幻十郎様・・」

素の女の声だ。

「すまぬ。いらぬ手助けをしてしまい」

「いえ・・そんなことより、今の技は・・どうなされた。すごい跳躍でございましたが、とても人技とは思えませぬが」

驚いているのは、幻十郎とて同じだ。
なんで急にあんな跳躍が出来るようになったんだ・・・

（決まってるでしょ、私が手助けしたんだよ）

又も、頭の中で声が響く。

しかし、声の詮索は後回しだ。
まずはみさとに、今の現状を聞く必要がある。

「あの男に心当たりは？」

「知りませぬ。いきなり道場に現れ、門弟に因縁をつけはじめ、見か

ねてとめに入った大前様の胴に木刀をめり込ませたのです。」

「道場破りにしては解せませぬな」

「そう言えば、幻十郎様、立会の最中、異なことを仰せられておられましたな」

みさとが思いだした風に尋ねてきた。

「私の腕を折るつもりだとか」

「そうです。あの男、しきりにみさと様の右腕を打ちすえよう、打ちすえようと、魂胆が見え見えでしが」

「私も感じていました。なぜ、私の右腕を狙うんでしょうね」

「さあ、それは、私にもわかり申さぬが、みさ

と様には、お心当たりがありませんか」

みさとは、首を振った。まったく身に覚えがないのだ。

「それにしても、嬉しい、幻十郎様が訪ねてこられるとは」

また、素の女だ。

まさか、門弟に連れられて来たとは、言いにくい雰囲気だ。

嬉しそうに、乱れた髪を束ね直すと、しっかりと、幻十郎を見据えた。

純粋な乙女の顔が笑っている。

「お茶でもお入れします」

「あ・・いや・・私はこの先用があって」

嘘ではない。
笠岡の屋敷に行かなければいけない。
常磐津の師匠の件、落とし所を探ってこなければいけない。

「駄目です。お茶は絶対飲んでいってください」

「わ・・分かり申した。もちろんお茶は喜んで頂きますよ」

こうなったら、お茶でも飲まないと、到底この屋敷から出してもらえそうにない。

「世吉。お茶の用意をしてください」

みさとが奥に向かって大声を放った。

その声を合図に、場に居合わせたそれぞれは、散会し始めた。

「さ、幻十郎様、行きましょう」

「あ・・はい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6292z/

神々の奇魔愚麗（きまぐれ）

2011年12月21日00時48分発行